

〈報告〉

わが子のいじめ自殺を通していじめを考える

NPO 法人ジェントルハートプロジェクト理事 小森 美登里

はじめまして。神奈川県横浜市から参りました小森美登里と申します。今ご紹介にありましたように、私は約 15 年前に一人娘の香澄をいじめ自殺という形で亡くしています。娘が亡くなって 15 年たちますが、この間さまざまなことを経験しました。そしていろいろなことを、とても深く考える場面に出会いました。

今私が考えているのは、天国にいる亡くなった子どもたちが、生きている私たちに大切なメッセージをいっぱい残してくれているのに、そのメッセージに真摯に向き合っていないんじゃないかということです。「死んだほうが楽だ」、そう思って死んだ子どもたちはいないと思います。心が深く傷ついて、死へと追い詰められていく。そんな感じがします。苦しくて苦しくて、考える力も生きる気力も奪われた先の死、いじめ自殺だったと思います。

(1) いじめとは心への虐待

先ほども尾木先生がおっしゃっていましたが、いじめとは心への虐待なんだということ、大人の私たちがまず実感したいと思っています。どのような形でそれを実感することができるか考えてみたのですが、小さな記事で結構ですので、ぜひ新聞のいじめの記事を探してみてください。自殺でなくてもいいんです。小さいいじめの記事を見つけたら、「いじめ」という言葉を「虐待」に置き換えて、もう一度読み直していただきたい。

そうすると、いかに子どもたちが学校の中

で緊張感を持って暮らしているのか、そしていじめというものがいかに卑劣なものなのかということにお気づきいただけるかと思います。私たちは今 NPO として活動しています。立ち上げたときにいじめをどう定義しようかということで、「心と体への暴力」と定義しました。それも間違いではない、間違っていないと今も思っています。

ただ、いじめという表現を使うことによって、お友達同士のからかいであったり、いざこざであったり、そういう部分だけで収まってしまうのは違うのではないかと。今起きているさまざまないじめの内容を知るにつけ、私は虐待だなど。親からの暴力でなくても、学校の中で行われていることでも、これは虐待だと実感しているわけです。

私の遺族としての経験などを、お話しさせていただきたいと思います。うちの子は高校 1 年生のとき、入学してから 3 カ月半後に亡くなりました。3 カ月半いじめに苦しんでいたのですが、この期間に関して大勢の大人が「あつという間ね」と言います。これも「虐待」という言葉を使っただければわかると思いますけれど、心と体への暴力はたった 1 回でも、たった 1 日でも、その人のダメージはとても大きく、そのたった 1 日という表現が私たちにはとても理解できなくなってくるんですね。

一日一日が生き地獄です。生き地獄のような 3 カ月半、100 日間はあつという間ではない。ですからいじめの報告を受けたとき、すぐに動ける体制を準備しておいてほしいと思います。よく学校の先生に相談したあと、「じ

や、しばらく様子を見てみましょう」なんて言われますが、子どもたちが大人にその苦しみを話るときは、もうぎりぎりだと思っていたほうが良いと思います。

そんなふうに私は、いじめの基本的なことも知らずに、我が子にいろんなことをやっていたわけですね。こういうふうにしたら励ます言葉になるんじゃないか、こういうふうにしたら解決するんじゃないか。いろんなことを思いつくままやっていたんですけど、それらはどうやら間違いがたくさんあったなって、今実感してます。今日は私の失敗もいっぱいお話ししますので、私の失敗を利用して、皆さんの周りにいる子どもたちの心と命をぜひ守っていただきたいと思っています。

(2) 娘を助けられなかったこと

香澄は高校に入ってすぐいじめを受け、3カ月半後に亡くなりました。その間に私が何をしていたか。まず最初にしたのは、担任の先生への相談でした。ここで出てきた一言が、「しばらく様子を見てみましょう」でした。私も一緒になって何の疑いもなく、しばらく様子を見ていましたけれども当然、元気になるはずなんかありませんでした。

そして毎日苦しい日々が続き、次にやったことは、青少年相談センターに相談に行くことでした。「香澄、行ってみる？」と言うと「うん」。全然拒むことがなかったんですね。一緒に行くと、先生は私の話も聞いてくれましたが、香澄と2人で1つの部屋に入って1時間出てきませんでした。当然どんな話をしたのか気になるので「どうだった?」、そんなふうに帰りの道々、香澄に聞いたんですね。

そのとき香澄が言った一言が非常に印象的でした。「スポンジみたいな先生だった」。思いも全部受け止めてくれたそうです。「そんなことがあったの? つらかったね。よく頑張ってるね。そんなふうに思いを全部受け止め

てくれる、スポンジみたいな先生」と言ったんです。私は大人になるまでの間に人の思いを全部受け止める、「そうだね」と傾聴する、そういう力がどんどんなくなっているというふうに、今実感しているんですね。

ぜひ皆さんも子どもたちから何か苦しみ、そんなものを告白されたら、今ぎりぎりですと話をしてくれただ。もう時間がずいぶんたっていて、心の傷は深いのかも。そう思いながらその人が感じたこと、そのことによって、いかに苦しいのかという思いを全部受け止めてほしいなと思います。

でも私は香澄に対して、それができなかったわけですね。「そしたらこうやって考えたらいいんじゃない。どうせね、あの子たちはいじめやめないよ。あんたがあきらめな」。でも私になぜ相談しているのかと言えば、あきらめられないから相談しているのに、「あきらめればいいのよ、あの子たちは変わらないよ。何だったら学校休んだっていいし、1年間学校休んだっていいよ」なんてその現実から逃げることばかり、私は娘に言っていました。

落胆したのかもしれませんが。娘は相談センターに行った日は元気になりましたが、また元気がなくなってどんどん状況は悪くなりました。そのあと「香澄、病院に行ってみようか」とメンタルクリニックに行きました。香澄と2人で病院に行くと、今度は香澄と先生と私と3人で約1時間の時間を割いてもらって、いろいろ話を聞いてもらったり、香澄も幾つかの話をしました。

そしたらやっぱり香澄はいじめを受けていたんです。想像どおりの3人でした。ここは病院なので、心を安定させる薬を出してくれました。香澄は忘れないように飲み続けていました。でもやっぱり元気にならなかった。学校の先生の相談もかなり続けていました。この3カ月半の間に保健室の先生、学年主任の先生、部活の顧問や担任とか、あとから手帳を見るとトータルで12回も相談していま

した。いただいた薬も一生懸命飲み続けていました。

今考えると、先生にも相談したし、相談センターも通っていたし、病院も行ったし、薬も忘れないように飲んでいたし、自分ではいろんなことを一生懸命やっていたつもりでした。でも肝心なことをしていませんでした。いじめている子たちのいじめ行為を止めてもらう。そのために周りの大人たちが、今何をしなければならぬのか。そんな肝心なことを何もしていなかったと思っています。

(3) いじめてしまう子どもに寄り添うこと

この経験から私は、いじめ問題というのは、いじめ被害者問題ではないのではないかと思うようになりました。遺族の私が言うと、まるで「我が子は悪くないんです」と、ただそれだけを主張しているように思われると残念です。そうではなくていじめてしまう子どもの、その裏側に抱えている苦しみにこそしっかり寄り添うことができなければ、いじめは解決しないんじゃないかと思えます。

ただ、これはめちゃくちゃ大変な作業で、先生方にそれを全部「よろしくお願いします」と言っても時間もかかるし、もしかしたら解決が難しい問題なのかもしれません。私がしていたような、いじめられている子どもにばかり、「無理して教室に行かなくてもいいよ。保健室登校でもいいんだよ。ああ、保健室も嫌か。じゃ、しばらくおうちにいようか。あ、フリースクールもあるよ。何だったら転校もあるよ」。いろいろな方法があるかもしれませんが、安全確保のためには重要なことだと思いますけれども、これだけではいじめの解決には至らないということだと思います。安全の確保と同時に、いじめてしまう子どもたちにまず寄り添うこと。それが重要だと思います。

私たちは活動の中で、アンケートをさせていただいています。実はいじめてしまう子どもにも、アンケートをとらせていただきました。そうするとびっくりするような数字が出ました。いじめてしまう子の7割の子どもたちが、自分自身も悩み事や何か苦しいことを、その頃抱えていたということを教えてくれました。この数字から見ても、やはり加害者への寄り添いが重要だとあらためて実感しました。

でも現場の先生がいじめている子どもに何をしているか。このあたりもいろいろな先生とたくさんお話していてわかったのですが、いじめ行為そのものにストレートに注意しているだけなんですね。見た現象に対して注意しています。「おいこら、何やってんだ。そんなことされたら自分だって嫌だろう」。このワンフレーズは、いじめ加害者は何回も何回も聞いているので、もう耳にタコ状態だと思います。

「自分がされたら嫌だろう」という言葉は、心に届いていない子がかかなりいるんじゃないかと想像しています。なぜかというと、ある加害行為をした子が言っていた言葉です。「いじめることによって相手が傷つくことで、何か自分に快感が返ってくる」。人間って、ずっと自分が被害を受けている、被害者だけで生き続けるっていうのは本当に苦しくて、被害者が誰かを傷つけながら心の安定を図るということも、どうやら起きているような気がしてならないんです。

いじめ問題はいじめ被害者問題ではなく、ついいじめてしまう子どもの心に寄り添い、そしてその子の抱えている問題を一緒に考えること。その子の苦しみを、まず思い切り受け止めることが大切じゃないかなって思っています。

これは被害者への対応より、とても時間がかかって大変です。やることもいっぱいあるし、そこには訳のわからない親まで関わった

ります。ある学校で聞いた話ですが、校長先生がいじめてしまう子どもの親御さんに、「こういうことを子どもに教えないでください」とお願いしたんですって。そしたらその親御さんが、「うちの教育方針に口出すな」と言ったそうです。ですから話し合いにならない親御さんがたくさんいる。

そしてまた別の校長先生は、いじめ問題の電話を1日3人受けると、自分の仕事が全くできないと言っていました。いじめの相談のお父さん、お母さんからの電話は5分とか10分じゃ切れないそうです。そういう相談を1日3本受けて、そしてそれが1回じゃ終わらなくて、また同じ人から電話があつてなんて、そのあいだは、自分の仕事ができないんだ、という叫びも聞いたことがあります。そんなふうには私は娘のことをやっけて、「ああ、私はいじめられている香澄のことばかりやっていたんだな。これじゃ解決しないんだな」ということを知るようになったわけです。

(4) NPO 法人の立ち上げへ

娘が亡くなったときは、精神的にも正常じゃないのはご理解いただけだと思うんですけども、本当に私、「こんな孤独であるのかな」という孤独を体感しました。世界でいちばん不幸なのは自分だと思っていました。自分の周りに何かバリアがあつて、他の世界とは異空間に自分がいるんですね。そして世界で2番目に不幸じゃなくて、世界で1番不幸なのは私、こんな人は世の中にいないって思っていました。

でも、我が子の死を無駄にしたくないという思いはどこかにあるわけです。だけど実際には何をしたいかわからなくて、ただ思いつくことから動き始めました。動き始めると、いろいろなところから、あちこちから矢だとか石だとかが飛んでくるんですね。「おまえ、まだ動いているのか」「いい加減にあきらめ

ろ」みたいな。「うちの子どもがあ学校に通ってるのに、あなたが動くときちょっと迷惑なんだよね」と言われたこともありました。その学校で起きた事件なんですよ。だけどその周りの親御さんたちが、ある日気づくと学校側にベタッとくっついてしまって、主人と私が2人きりで離れ小島にいるような状況になってしまったり。

そんなふうには動けば人はどんどん離れていきますけれども、ありがたいことに新しい縁も生まれてきました。私と主人が本当に任意で、夫婦で勝手にガサガサ動き始めたのを見た何人かの仲間が、「小森さんの活動を、もっとちゃんと形にして広げたほうがいいよ、学校の中に入っていったほうがいいよ。じゃ、NPOになろうよ」と、どんどん広がっていったんですね。

うちの法人はひとりひとりが本当に専門性を持っている人間がいて、それぞれの力を結集して、みんなで1つの命みたいな形で活動が進んでいます。どんな活動をしているかというと、アンケートをとらせていただいたり、勉強会を開催したり、嫌われながらも国にも申しに行ったりとか、いろいろなことをやっています。今日は学校の先生へのアンケートで、1つの質問についてご報告させていただきます。

(5) いじめの報告をしっかりと受け止めて

「いじめの報告は誰から受けることが一番多いですか」という質問です。これも驚異的な結果が出ました。ちなみに先生がいじめを知るきっかけは、何が一番多いと思います？あまり数字が大きく変化してないのですが、一番が他の児童・生徒からでした。いじめられている子が直接報告するというのではなく、他の児童・生徒が先生に「ねえ、あの子いじめられているよ」って報告してくれてい

ました。これは小中学校で出した数字で41.2%、そして二番目が本人でした。本人から言うのが約37%。三番目が親で17%。尾木先生の話とも重なるのですが、残念ながらカウンセラーが機能しているのかなと思いました。

あと先生同士の連携も、残念ながら、わずかでした。保健の先生や養護の先生からの報告も非常に少なかったのですが、カウンセラーの先生よりは多いですね。保健の先生を2倍にしてくれたらいいかなと、素人ながらにふと思ったりしました。

こんなふうに先生方って、けっこういじめの報告を受けているようです。ただ、それを深刻にきっちり受け止めてくれているのか、サラッと流しちゃっているのか。きちんと受け止めはしたのだけれども、どうしていいかわからないから、しばらく様子を見ちゃったのか。いろいろな問題があると思います。しばらく様子を見るというのは、絶対にやっではないいけないことで、事実確認をきっちりしなくちゃいけないと思っています。

この事実確認のやり方ですけれども、今日は私のアイデアもちょっとあるのですが、時間の関係で割愛させていただきます。いじめられている子に、「おまえ、いじめられてるのか」とストレートに聞いてしまう先生がめっちゃ多いようです。けれど、それはダメみたいですね。この活動が始まって、いろいろなことを知ることになりました。そして先生方のスキルが、とても低いなと実感しています。対応の仕方を知らない先生方が、言葉は悪いんですけど、ほとんどじゃないかなという実感です。

(6) 被害者を追い詰める被害者責任論

被害者責任論をよく言っています。これはたくさん先生から聞きました。「何かあなたにも原因があるんじゃないの?」。いじめられ

て、やっとなら相談しに行ったのに、そう言われたらどうですか。もし自分がいじめられたとします。もうつらくて、つらくて、いい加減にしてくれないかな、そろそろやめてくれないかなあ。そう思っても、なかなか相手がやめてくれない。そのうちにどんどん心の傷が深くなっていくわけです。もうこれ以上、我慢できない、もうダメ、ぎりぎり。

あの人だったら聞いてくれるだろうか。そう思ってその人に相談しました。やっとなら相談したとき、その人が「でもさあ、あなたにも何か原因あるんじゃないの?」。今までいじめによって、深く心が傷ついているわけですね。そこにもう1つ、「あなたにも原因」と言われたとき、異質のショックを受けるんじゃないでしょうか。ですから私は被害者責任論は人を死へと追い詰める、そんな力もあるような気がしてなりません。

あと、けんか両成敗をしている先生が非常に多かったですね。お互いを連れてきて、ごめんね、握手しておしまい、なかったことにしようね。これでは両方が納得いかないわけです。一度ばれていきますから、次やるときにはまた水面下という形で、もっともっと問題が大きくなってしまいう可能性があります。

また「傍観者は加害者」という言葉が、当たり前のように使われていますが、傍観者の子どもたちが好きで傍観しているわけではないという実態も教えてくれました。守ってあげたいんです。でも、こう言いました。「圧倒的な恐怖を前に、どうしても動けない」。その圧倒的な恐怖が何なのか。それは昔のいじめと今のいじめは違うというところにあるような気がしています。

簡単に裸の写真撮るんですね。この裸の写真を取って「おまえ、金持ってこい。恐喝してこい」だとか、「やつ、いじめてこい」「万引きしてこい」だとか、いろいろなことを言うわけです。「言うことを聞かなかったら、わかっているよな」と言われたら、もう言うこと

を聞くしかない。なのでさっきの話とつながるのですけれども、加害行為、いじめ行為を見たときに、ストレートに注意してしまうと、その子が抱えている裏の問題まで見ること、探ることができなくなってしまうんですね。

なので私は学校の先生に講演をさせていただくときは、「どうしたんだ、何かあったのか」と、まず心配してあげてくださいとお願いしています。そして「あ、この先生、自分のこと心配してくれてる」とか、うまくいけば「あ、愛してくれてるのかな」とも思ってもらえることができるかも。すると今やってるいじめを、それ以上加速させるようなことはなく、とりあえずそこで、できればもう少しトーンダウンさせて、みたいな期待をしているのですけれども。「どうしたんだ。何かあったのか。よかったらおいで。話聞いただけしかできないかもしれないけれど」。そんな言葉を廊下ですれ違うたびに声かけてあげることなんかできないですかね、というふうにお願いをしているわけです。

傍観者はダメだと言ったって、じゃ、大人の皆さんに、裸の写真撮られるくらい覚悟して守ってあげてと言ったって、なかなか勇気が出てこない。大人ができないことを子どもたちに強いていた。じゃ、傍観者が何もしなくてもいいのかと言っているんじゃないんですね。周りにいる子どもたちが連携してできる何かを探してほしいなど、私は考えています。

正直いうと、ここの部分についてなかなか答えが見つからない、どうしていいかわからない。加害行為をしている子どもに「そんなに頑張らなくていいよ。君は1人ぼっちじゃないんだよ、大丈夫だよ」って伝えたいのだけど、それはどうやったら伝わるんだろう。傍観者と言われている子どもたち、その周りの子どもたちが連携してそれをしようと思ったとき、どんな形ならできるんだろうと今考えています。子どもたちには、何か良いアイ

デアがあったら教えてねとお願いしながら活動をしています。

(7) 親御さんのこと、いじめ防止対策推進法のこと

もう1つ大きな問題は、親御さんがこの問題に非常に関心がないんですね。私は学校に講演に行くのが半分ぐらいあります。講演させてもらおうと、PTAの方用に先生方はいっぱいパイプ椅子を並べてくださいます。ところが、埋まることはありません。生徒の人数の1割の親御さんが講演会に来たら、「うわあ、すごいね。大成功」というのが現状です。

でも、いざ自殺事件が起きた、緊急保護者会だとなるとご夫婦で来られます。だったら自殺事件が起きて緊急保護者会を開くようなことがないように、みんなで一緒に話し合いたいな、興味を持ってもらいたいなと思っています。なのでちょっとせこい作戦ですけども、私の講演会を学校から親御さんに出してもらおうとき、一言「いじめのある教室の成績は上がらない」って入れてもらおうんです(笑)。「えっ、成績に関係あるの?」。ちょっとだけ来てくれる人がいるんですね。私はうそは言っていないので、この点、ぜひ皆さん、今後ご利用ください(笑)。

もう1つ「いじめ防止対策推進法」ができました。22条で「いじめの防止等の対策のための組織を置くもの」と、各学校で置くんですね。対応しなければいけません、そうすると先生方はとんでもない面倒くさい法律ができちゃったと思っているようです。

10月2日の「朝日新聞」を見ますと、「教員は目の前のさまざまな問題で手一杯。体制を変える予定はない」と断言しています。「現場の課題はいじめだけではなく、他に特別支援、不登校やアレルギー対応など、いっぱいあるからいじめのことができないというんですね。いやいや、いじめと不登校を別々に考

えるなよというところで、本当に現場の先生方がいじめの問題を理解できていないのだなと思ってしまいました。

ぜひ学校の先生が何していいかわからない、誰がやるの、何やるのと思ったとき、子どもたちと一緒に何かやるのはもちろんいいんですが、ぜひ先生と子どもたちと一緒にやってほしいと思います。そのためには、まずは安心して相談してもらえ大人になることを優先させて欲しいと思います。どっちかがどっちかに頼んだよという今までの対応では、効果がないと思います。

今までいろいろなことがありました。シンポジウムを開催する、ポスターをつくる、標語を学校中に張るとか。標語って学校中に張られると、いじめをしてる子は居心地が悪くなりますよね。大人は「みんなの話をこれからしっかり聞くようにします」とか、何でもいいんですけども、「皆さんの思いをすべて受け止めます」みたいに。何か大人がこれやる、子どもがこれやる、一緒に何か目標をつくることができたらいいのではないかと考えています。

あと 28 条で、重大事態が発生したときは質問票を使用して調査しなければいけないとなっています。この調査の確立が現在できていません。自殺事件が起きた直後、何をしなければいけないのか。例えば調査する、アンケートする、その紙のフォーマットみたいなものでできていないんですね。質問票を作って、調査用フォーマット^(注)を作って、調査を確立してほしい。直後の調査がなければ、調査委員会を立ち上げてても事実に向き合うことはきっとできないと思います。

今言ったように 22 条の問題がとても大きいと思います。学校の中で組織を作らなければならぬ。そしてその組織が、仕事が増えてしまうのではないんだよということを、私たちは伝えなければならぬ。そのために本を書いたり、チラシを作ったり、こんな年間

スケジュールはいかがですか、こんな予防対策、予防方法はいかがですかと。紙であったり何であったり、私たちはこの問題に特化して活動してきた人間として、学校現場の先生たちに届けるものをしっかりつくらなければいけないと思っています。

(8) 「優しい心がいちばん大切」

最後に、ちょっと遺族っぽくやらせてもらいます。私の娘です。15 年前に自殺しました。亡くなる 4 日前に「優しい心がいちばん大切だよ」って、私にはっきり言いました。私はこの言葉に、もう 1 つ大きなメッセージを感じています。「人はひとりぼっちでは生きていけないんだよ」。そう言っているような気がするんです。私は 1 人では生きていきません。出会った人とつながって支え合って生きてきましたし、これからもそうやって生きていきます。

皆さんも、これから多くの人と出会うと思います。人が人と出会いつながるとき、優しい心でつながってほしい。そういうメッセージを感じています。「優しい心がいちばん大切だよ」。短い単純な言葉なんですけれども、よかったら伝えてあげてください。本日はご清聴、ありがとうございます。(拍手)

注) なお調査用フォーマットは、小森美登里著 (2013) 『いじめのない教室をつくらう』WAVE 出版を参照のこと。

2013年10月2日 (水)

18:20-20:45 (開場 17:50)

法政大学市ヶ谷キャンパス
外濠校舎 2階 S205 教室

法政大学教職課程センターシンポジウム いじめ問題を考える

—大学における教員養成の視点にたって—

プログラム

18:20-18:30 開会挨拶

18:30-19:10 講演

いじめはなぜ止められないのか
子どもの命がなぜ守れないのか
尾木 直樹 (法政大学教職課程センター長)

19:10-19:40 報告

わが子のいじめ
自殺を通していじめを考える

小森 美登里 (NPO法人ジェントルハートプロジェクト理事)

19:40-19:50 休憩

19:50-20:10 報告

自分たちの体験からいじめを考える

法政大学キャリアデザイン学部生 /
遠藤 野ゆり (法政大学キャリアデザイン学部准教授)

20:10-20:40 講演・報告を聞いて

20:40-20:45 閉会挨拶

申込み方法

—参加費無料—

事前申込
先着定員制

【一般の方・卒業生・法政大学教職員】

e-mail: kkc@ml.hosei.ac.jp まで以下

申込み情報を記入してお送りください。

(1) 件名: シンポジウムの申込み (2) 氏名

(3) ふりがな (4) 電話番号 (5) 参加人数

【法政大学学部生・大学院生の方】

e-mail: kkc@ml.hosei.ac.jp まで以下

申込み情報を記入してお送りください。

(1) 件名: シンポジウムの申込み (2) 氏名

(3) 学部・学科 (4) 学生証番号 (5) 携帯番号



携帯用 QR コードをご使用の方
は上記の申込み情報を入力
してお申込みください。

交通アクセス

●最寄駅●

【JR】総武線: 市ヶ谷駅、飯田橋駅

【地下鉄】都営新宿線: 市ヶ谷駅

東京メトロ東西線: 飯田橋駅 / 都営大江戸線: 飯田橋駅

東京メトロ有楽町線: 市ヶ谷駅、飯田橋駅

東京メトロ南北線: 市ヶ谷駅、飯田橋駅

※市ヶ谷駅、飯田橋駅より各徒歩 10 分

【多摩シンポジウムのお知らせ】本学多摩キャンパスにおいて 2013 年 11 月 26 日 (火) 17 時 30 分より教職課程センター
多摩シンポジウムを開催します。詳細は追って、本学ホームページに掲載予定です。

HOSEI

主催 法政大学教職課程センター

【お問い合わせ】 TEL 03-3264-5562 月～金曜日 10:00～17:00